編集後記――過去・現在・未来から見る学びの構造転換

「学びの構造転換」は、教育学史上の巨人・20 世紀前半のアメリカ哲学界で進歩的な民主主義者として知られるジョン・デューイ、その弟子・同僚でもあったキルパトリック由来の「プロジェクト・メソッド」に基本のアイディアを負っています。主体性と多様性を基軸とする経験学習の展開に当たり、我が国が培ってきた教科専門性・系統学習の知見を“あらかじめ”の計画ではなく“後追い”の首尾一貫性に生かす。その意味でこの挑戦は、近代教育学史上の代表的な方法対立を止揚する試みにも位置付けることができます。

ここでは、こうした歴史的な視座に立ち、今年度の調査結果も引きながら、学びの構造転換、とりわけその価値について補説したいと思います。

(1) 過去――皆同じ

合理化＝計算可能性の増大を旨とする「近代」の始まりは、西欧中心的な世界史ではウェストファリア条約によって主権国家が成立した 17 世紀中頃、フランス革命のあった 18 世紀末、産業革命の起こった 18 世紀から 19 世紀とされます。日本史では明治時代の始まった 1868 年、それ前の徳川と織豊の時代を「近世」とするのが一般的です。

時間と空間の形式を定時法やメートル法で標準化する。同じく人々の学びを学制で統一する。中央集権によって富国強兵・殖産興業を目指したその発布後間もない 1874 年、当時の教場風景を今に伝える『訓童小学校教導之図』を見てみましょう。既にそこには、黒板や掛図を使う経済合理的な一斉教授が描かれています。その後も教育令、小学校令、国民学校令、そして教育基本法と法は改正され、求めた理想も、独立独歩で生きて行く個人から天皇に奉仕する臣民、さらに平和と民主主義の担い手、熱心に働く企業戦士と変わっていきます。しかし、戦後の高度経済成長を実現し、二度にわたるオイルショックを乗り超えた国家総力体制が 1940 年頃に完成したとの説に最たる事例を見るとおり、公(政府)の要請する人材を育てる点で教育制度の役割は一貫していました。

端的に言えば、「皆同じ」。私(個人)の側からしても、新旧「三種の神器」に代表される基本財普及と 1973 年「福祉元年」に象徴される社会保障制度拡充への欲望がそれなりに充足するまでは、大きく幸せの形が多様化することもありませんでした。

(2) 現在――同じから一人一人の違いへ

逆説には、財と制度がある閾値を超える水準に達したとき、マズロー流に言えば低次な欠乏欲求が満たされたときに高次かつ多様な成長欲求が開花します。例えば日本では 1980 年代からテレビに続き電話が個室化。平成に始まる経済停滞を経験しつつも、とりわけ 95 年来のインターネットとコンピュータを経由し 2007 年に登場したスマートフォンの普及は、基本財の個人化における一つの到達点です。AI アシスタントを備えた MOOCs で皆が世界中の良質なコンテンツで学べる。そんな日も遠くはないでしょう。

さて、ならば一人一人の学びを保障する制度でもある学校教育は、果たしてどこまで多様な個人(化)に対応可能なものとして展開しているでしょうか。このことと関連して、今年度の本区調査から、「授業では、自分の得意な部分を伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、一人で学んだり、先生が個別に教えてくれたりする時間が

ある」との質問項目の結果を参照してみます(p.164)。小学校第 3 学年から中学校第 1 学年で R1 群の肯定率が他よりも高い傾向は、第一に、皆と同じように学ぶことが難しい子どもたちを何とか支えようとする教員の努力の現れとみることができます。

しかし、です。現在の私たちが突き当たる教育の難問は、その一端を「はじめに」で述べたとおりです。そして、難問を根元から引き抜こうとする学びの構造転換の視座に立てば、同結果の解釈は一変します。特にポイントになるのは、学びの〈個別〉化における「自己選択」の機会の拡充。全体の肯定率がどの学年も 50%に満たないことはもちろん、特定の段階のみ高い／低いという傾向は学びが一斉にとどまる現状を反映しています。「授業中、ペアやグループで活動したり話し合ったりする時間が多くある」の肯定率が学力段階間で差がある傾向(p.166)なども同じくです。「一人一人の違い」を制度設計の始発点とした学び、ひいては学校教育への転換が求められます。

(3) 未来――違いを強さと優しさに

そうして未来。しかしながら学びの構造転換の価値は、2020 年から数えること 10 年先、いわゆる“2030 年”に向けて「主体的・対話的で深い学び」の本質的な実現を目指すことにとどまりません。「予測困難」「知識基盤」と呼ばれる未知との出逢いが日常であるような社会状況において、他者との協同や人工の問題解決存在との共生も選択肢に必要な知を自ら学び取るための「学び方」を育むことにも限局されません。

近代学校教育制度は、ちょうど「近代家族」がそうであるように、多くの人にとって「選びようがない」ものとして経験されました。教科と単位時間、何より時間割によって細切れにされた一斉教授／学習の授業こそこの制度の「本体」です。学びの構造転換は、補完や代替の(周辺)機会を拡張する必要を十分考慮しながらも、本体を学習者の主体性と多様包摂性で満たすことを目指します。全てが一人一人の自由な選択と決定に貫かれているにもかかわらず、事後に省みれば学びを通じたあらゆる人・物・事との出逢いがまるで運命付けられていたかのような信憑を悦びの感情とともに生じさせる。「恋人」や「拡張家族」はそのよきアナロジー、そこでこの原理に基づく未来の学校の姿を、ひいては、人々が織り成す社会のありようをどのように思い描けるでしょうか。

私たちは、「カリキュラム」という考え方自体が近代の産物である可能性を捨ててはなりません。“後追い”の首尾一貫性を突き詰めれば、“あらかじめ”の計画を基軸としない学びの在り方がおのずと要請されるからです。やや大袈裟ですが、遡ること約 100 年、デューイとほぼ同じ時代を生きたアルバート・アインシュタインの相対性理論が極限におけるブラックホールの存在を予言したように、あらかじめのカリキュラムの脱構築は学びの構造転換の後追い的視座がもたらす半ば必然の帰結ということです。

そんな可能性の未来を想像するのは、実に楽しいものです。そして私は、人との違いが強さと優しさになる社会を目指すことも同じく必然だと思っています。共生する知の時代、ディープラーニングに代表される技術革新はその支えとなるでしょうか。いわゆる「六次の隔たり」からすれば、私たちの多くは既に点線ほどには関係しています。しかし、隔たり次数を劇的に減じるランダム線を引き、そうした出逢いの織り重なりを全ての人が包摂される実線の社会へと育て上げるために、私たちは、まず、眼前の子どもたちへの関わりを見直す必要があります。学びの構造転換は、その最初の一歩です。

杉並区特定の課題に対する調査、
意識・実態調査報告書

平成 31 年度

登録印刷物番号
31－0070

令和元年 11 月発行

編集・発行
杉並区教育委員会
杉並区立済美教育センター
〒166－0013　杉並区堀ノ内二丁目 5 番 26 号
電話 03(3311)0021